

融合文化の結晶体としての新作能『能：リア王』の世界
—父リア王と娘コーデューリアの〈魂の救済〉を描いた悟りの芸術—

The World of *Noh: King Lear* as Hybridity
of Harmony and Combination of Cultures

平 辰彦
TAIRA Tatsuhiko

Abstract: Starting with *Noh:Hamlet* in English a quarter century ago, followed by *Noh:Othello*, *Noh:Macbeth*, and so on, performing himself in English, and also by *Noh:Othello*, *Noh:Hamlet*, and others in Japanese performed by professional Noh actors, Kuniyoshi UEDA has arrived at the excellent production *Noh:King Lear* in Japanese. Ueda's *Noh: King Lear* achieved the art of "Satori or enlightenment." This is the best of Shakespeare's drama in the style of Noh. In this adaptation the leading role is not King Lear, but Cordelia. Ueda cut most of the scenes in Act I—IV. The opening speech is Cordelia's: "All bless'd secrets, / All you unpublish'd virtues of the earth, / Spring with my tears!" (IV. iv). Ueda succeeded in developing Shakespeare's theme of love and redemption of souls between Lear and Cordelia. In the later scenes King Lear, acted by Yoshihisa ENDOU appeared on the stage holding Cordelia's body represented by a karaori-kimono. The later scenes are so pitiful and so tragic, but I felt relieved when Cordelia's ghost danced together with the ghost of Lear. The moment Reiko ADACHI, the eldest female Noh performer of Japan, as Cordelia danced on the stage, I felt completely Zeami's concept of "yugen or mysterious and profound beauty and *Makoto no Hana* or true flowers." I believe Ueda's *Noh: King Lear* is a valuable contribution to the Harmony and Combination of Cultures between Japan and England.

Keywords: *Noh:King Lear*, Cordelia, Satori, yugen, Makoto no Hana 『能：リア王』、コーデューリア、悟り、幽玄、真の花

はじめに

シェイクスピアのドラマの世界と日本の古典芸能である能の世界が融合された上田（宗片）邦義の〈能：シェイクスピア〉は、悲劇『ハムレット』の世界を能様式で表現することから始まった。

私は1982年、矢来能楽堂で五幕形式による英語能『能：ハムレット』を見て以来、すっ

かり上田邦義の＜能：シェイクスピア＞の世界の虜となり、能様式による英語能『能：マクベス』『能：オセロ』『能：リア王』とシェイクスピアの四大悲劇をすべて見てきた。特に『能：ハムレット』を複式夢幻能の様式で見た時、英語能ではなく、新作能として『能：ハムレット』を見てみたいと思った。

その後、1992年、宝生能楽堂で見た日本語による口語能『能・オセロ』をはじめ、2004年に日本大学カザルスホールで上演された新作能『能：ハムレット』を見て、シェイクスピアの世界と世阿弥の大成した能の世界が完全に舞台上で融合されたものになったと確信した。

今回の新作能『能：リア王』は、＜父と娘のドラマの世界＞を描いたシェイクスピアの悲劇『リア王』と複式夢幻能という能様式によって創造された＜幽玄の美の世界＞が融合されていた。この演能は、上田邦義のめざした＜能：シェイクスピア＞のひとつの到達点を示したものであり、まさに能様式によるシェイクスピア劇の＜悟りの芸術＞ともいえる舞台であった。

I 『能：リア王』の前場の世界

シェイクスピアの『リア王』は、(1) 父リア王と三人の娘の世界 (2) グロスター一家の父と息子の世界 (3) コーディーリアによって象徴される世界の三つの諸相から成り立っている。この三つの世界の中で主人公のリア王は、長女と次女の忘恩に苦しみ、誤って勘当した末娘の＜愛＞によって救われるという (1) の世界を主筋に展開しながら、(2) と (3) の世界を脇筋にしている。

リア王は、八十歳になり、第一幕で長女と次女に王国を分与したにもかかわらず、たちまち出て行けがしの冷たい仕打ちに出会い、第二幕で嵐の荒野へ飛び出して行く。そして、次第に正気を失い、第三幕で嵐の中で「吹け、風よ、おのれの頬を吹き破れ！」と叫ぶ。そこでリア王は、「わしは罪を犯すより犯された人間だ。」(I am a man / More sinn'd against than sinning.) と認識する 1)。このようにリア王は、自分の意志で運命に挑み、死に至るといふ悲劇の主人公ではなく、過酷な受苦に耐えていかなければならない人間として描かれている。

リア王は、この第三幕で変装した忠臣ケント伯の案内で嵐を避けるべく小屋に入り、そこで異様なものを目にする。それは、グロスター伯の長男エドガーが、腹違いの弟エドマンドの策略により父親殺しをはかったとの無実の罪を着せられたため、正気を失った乞食に身をやつした姿であった。リア王は、それを見て「人間とは、衣装を剥ぎ取れば、お前のように、あわれな裸の二本足の動物にすぎぬ。」(unaccommodated man is no more but such a poor, bare, forked animal as thou art.) と述べ、この姿こそ人間本来の姿であると悟る。

第四幕でリア王は、狂気の度を増し、野草の花を身につけて登場。そこでリア王を助けようとしたためにリーガン夫妻に両眼をえぐられたグロスターと出会う。目の見えないグロスターは、声でリア王と知り、「王ではありませんか？」(Is't not the King?) と問いかけると、リア王は「この五体のすみずみまで王だ」(Ay, every inch a king:) と答え、目の見えないグロスターが悲しむのを見て「わしの不幸泣いてくれるなら、このわしの目をやろう。お前のことはよ

く知っておる、グロスターだろう。忍耐せねばならぬぞ。」(If thou wilt weep my fortunes, take my eyes; / I know thee well enough; thy name is Gloucester; / Thou must be patient;) といひ、「人間、生まれてくるときに泣くのは、/ この阿呆どもの舞台に引き出されるのが悲しいからだ。」(When we are born, we cry that we are come / To this great stage of fools.) と語る。狂気の中にも真実を語るリア王のこの台詞は、痛ましい。

シェイクスピアの『リア王』は、このようにリア王と三人の娘の世界を主筋にしなが、グロスター一家の世界を描く脇筋が絡み合い、同じテーマを強め、同じ感情を深めているが、上田邦義の『能：リア王』では、このシェイクスピアの『リア王』の世界が第一幕から第四幕まで大胆にカットされ、リア王の〈魂の救済〉がコーディーリアによって行われる物語に焦点が当てられている。そのため『能：リア王』は、シェイクスピアの悲劇『リア王』の第四幕第四場から始まる。しかもシテはリア王ではなく、コーディーリア。コーディーリアは、父に勘当され、フランス王妃となっている。

舞台上に登場した前シテは、「げに恵み深き大地に潜み。いまだ知られぬすべての薬草よ、わが涙を受けて芽を出だし。」と祈りながら謡いだす²⁾。この歌詞は、『リア王』の第四幕第四場で述べられるコーディーリアの“All bless'd secrets, / All you unpublish'd virtues of the earth, / Spring with my tears!”の台詞から採られている。

さらに前シテは、正中に座し、夢の中でリア王が「荒海の如くに猛り狂い。大声に歌を謡って」いる姿を見る。この歌詞は、『リア王』の第四幕第四場で述べられるコーディーリアの“Alack, 'tis he! Why, he was met even now / As mad as the vexed sea, singing aloud.”の台詞から採られている。前シテは、夢の中で乱心した父の姿を見て父を探しにドーヴァーへと向かう。

舞台上には、橋掛かりを渡り、悪尉の面をつけ、狩衣を身につけたリア王が登場。リア王は、長女と次女に裏切られ、怒りに正気を失っている。そのリア王の魂の叫びを地謡が「吹け嵐。貴様の頬を吹き破れ。貴様の頬を吹き破れ。吹け吹け怒り猛り狂へ。」と謡う。この地謡の歌詞は、『リア王』の第三幕第二場でリア王が叫ぶ“Blow, winds, and crack your cheeks! rage! blow!”の台詞から採られている。

前シテは、乱心した父の姿に深く悲しみ、霊気を宿した唇で「接吻」する。すると、リア王が目覚める。目の前にいるのが、「誠の娘コーディーリア」とわかると、リア王は、涙を流して喜ぶ。地謡は、リア王が娘に逢えた嬉しさを謡う。

父と娘は再会し、お互いの魂は至福のひと時を味わう。地謡は、「さあ行こう、二人だけの世界へ、そして籠の中の小鳥のように歌おうよ」とリア王の心情を謡う。この歌詞は、『リア王』の第五幕第三場でリア王が語る“Come, let's away to prison; / We two alone will sing like birds i'the cage;”の台詞から採られている。

二人は、橋掛かりを渡り、奥へと消え、中入りとなる。

Ⅱ 『能：リア王』のアイ語り

シェイクスピアの『リア王』では、道化は重要な登場人物である。この道化は、頓智と諷刺精神をもった歌などを歌い、王侯貴族に仕える宮廷の道化で「賢い道化」(wise fool)と呼ばれている。その道化の言葉には笑いを凍らせるほどの痛みをもつ。『能：リア王』でも、こうした「賢い道化」と呼ばれるリア王のお抱え道化が狂言のアイとして次の謡いをうたいながら登場。

「この世は二つ
見える世界と見えない世界
この世は二つ
言葉の世界と心の世界
この世は二つ
心の人と言葉の人よ」

アイは、「ブリテン王リア殿に仕え申す道化でござる。」という名乗りのあと、悲劇『リア王』の世界を次のように語る。

「さても哀れなるわがブリテン王かな。齢八十にして王位を退くはよし。されどその三人の姫たちに、その領土・財産を分割するにあたり。御前会議にて愛情の程を述べさせるとは一。上の二人はすでに嫁ぎたれども。『父上のみを愛す』と言葉巧みに述べたれば。それぞれブリテン王国の領土の三分の一ずつをもらい申した。されど末娘は。姉たちの心をすでに読み取りたれば。ただ『無』とのみ答えたり。言い直せと命ぜられければ。言い直すではなく。『いずれわが身も嫁ぐことなれば。姉姫たちの如く父上のみを愛すとは公言できず』と。その真実の『心』を申しければ。リア殿はそれに逆上し。最愛の末娘を勘当してしまわれたのでござる。」

アイは、その後、リア殿がすべてを相続した長女と次女に裏切られ、嵐の夜に城を出て彷徨い歩く哀れな有様を語る。しかし、荒野を彷徨う中で道化は、リア殿のお姿を見失ってしまう。

一方、勘当されたコーディーリアは、フランス王妃になられたが、父上が姉姫たちに粗末に扱われたことを伝え聞き、ドーヴァー海峡を渡ってリア殿にお会いなされた。しかしコーディーリアは、父上と再会したにもかかわらず、姉姫たちの軍隊に捕らわれの身になってしまわれたのだ。

アイは、リア殿を「急ぎお探し申そうと存ずる。」と語り、次の謡いをうたいながら、橋掛かりを渡り、静かに舞台を退場。

「思えばこの世は三つの世界
心と言葉と行動と
三つとも大事のこの世かな
三つとも大事なこの世の世界

三つの世界が一つにならねば
リア王殿は救われぬ」

このアイの謡いには、『能：リア王』の重要なテーマが表現されている。それは、リア王の「心と言葉と行動」の「三つの世界」が三位一体となった時、はじめてリア王は救われるというものである。

Ⅲ 『能：リア王』の後場の世界

後場でリア王は、唐織を抱きながら、登場。この唐織はコーディーリアの遺体を表象している。これは、能『葵上』などで用いられている能の象徴的な演出法である。

リア王は、舞台正面の正先で、その唐織をそっと置き、扇を開き、首のところにもっていく。この時、地謡が、「この首のボタンを外しておくれ、」と謡う。この歌詞は、『リア王』の第五幕第三場でリア王が“Pray you, undo this button:”という台詞から採られている。扇を唐織の上にはらりと、落とすと、地謡が、「これをご覧、見よ見よ、コーディーリアの、唇動きて何か言いたるぞ、何言ひたるやコーディーリア」とリア王の心情を謡う。この時、リア王は、右手をかざし、下手の上を見上げて、やがてがっくりと右手をおろす。リア王が静かに息を引き取った瞬間である。

おもむろに太鼓の音がごく小さく鳴り続く。死んだリア王は、ワキ座へ。幽霊となったリアは、その白髪の頭上に王冠をつけている。

橋掛かりを渡り、あの世からコーディーリアの幽霊が登場。この後シテは、王として威厳をもった「父上の御霊(みたま)」を目にして「あら有難の御有様やな」と語り、早舞を舞う。やがて、狩衣を脱ぎ、幽霊となったリア王が立ち上がり、娘コーディーリアと共に舞う。

父と娘のふたりの魂は、共に舞いながら、ひとつに融合し、「真実(まこと)の国」へ昇天していったのである。これは、シェイクスピアの悲劇『リア王』を題材に複式夢幻能の様式を用いて翻案した父リア王と娘コーディーリアの美しい<魂の救済>の物語である。

クライマックスで舞われるこのふたりの美しい<相舞>こそ、まさに<魂の救済>が実現した瞬間であり、『能：リア王』がシェイクスピアの悲劇から上田邦義の「悟り」(enlightenment)の芸術に至った瞬間であった。

おわりに

シテを演じた足立禮子は、現役最長老の女流能楽師。八十五歳とも思えない美しい舞姿で可憐なコーディーリアを演じきった。世阿弥のいう「真の花」がある美しい舞姿であった。また、リア王を演じた遠藤喜久の演技も重厚で、リア王の心情をよく表現していた。

さらに、横井紅炎の舞台デザインも、新作能らしく、斬新で心に残った。

私は、この融合文化の結晶体ともいえる『能：リア王』を見て、「心と言葉と行動」が三位一

体となった時、はじめてリア王の魂が救済され、「真実の国」へ旅立つことができたのだと悟った。

この世にすでにいない私の亡父（ちち）と亡母（はは）も、リア王とコーディーリアのように「真実の国」で幸せに暮らしていることだろう。

この演能は、私にとって、まさに人を「悟り」に導く妙薬ともいえる＜悟りの芸術＞であった。私自身の魂も救済されたような清々しい＜魂のカタルシスを感じた舞台＞であった。

（2010年12月23日、東京四谷紀尾井小ホールにて「花の座」公演『能：リア王』観能）

註

- （1） 本稿で引用したシェイクスピアの『リア王』の原文は、すべて Kenneth Muir 編のアーデン版『リア王』（*King Lear*）を使用した。
- （2） 『能：リア王』の歌詞の引用は、すべて『能：リア王』（上田邦義作：足立禮子・鈴木啓吾作補）の上演台本による。